

妙安寺だより 370

喪服は白色だった

喪服は本来、死者を出してに包まれた遺族が、他にうつさないためのみもりの衣装でした。それが明治以降、葬式という儀式の場で着る礼服とされ、遺族しか着なかったはずの喪服を、会葬者皆、着るようになったのです。

喪に際して着る特別な服が確認できるのは古墳時代以降で、7世紀の隋書『』には、日本では『妻子兄弟は白布で服を作る』と記されています。だが、718年の養老葬送令で、「天皇は2親等以上の喪に際して、（め色）の衣を着用する」と定められたのを機に、朝廷で黒い喪服が広まり始めました。

なぜ、黒い喪服が採用されたのか。学習院大学の増田教授（日本服飾史）は「勘違いが原因」と推測。「養老令の規定は、唐の皇帝が喪の際に着る『』を模倣したものと思われませんが、中国では『錫』は目の細かい白の布を意味します。日本ではなぜか、錫＝（錫の黒っぽい色）と誤解し、喪服が黒になってしまった」が、黒い喪服の時代は長く続かなかったようだ。

鎌倉～室町時代の有職故実書『』には「俗人の服衣はである（略）鎌倉には白布に少し墨を入れて薄墨に染める」とあって、鎌倉時代まで黒系統だった喪服が再び白に戻ったことがわかる。

国学院大学の新谷教授（民俗学）は「1960年代には、まだ白の喪服の割合が男性で4割、女性では5割を超えていました」と語る。1909年の伊藤博文の国葬では、西洋にならい、黒の燕尾服を着用せよとの服装心得が示された。

韓国では、喪服の色はいまだに白が本筋で、淑明女子大の教授は「歴史書からも古代から白い喪服を着ていたとわかります。白にはすべての色が含まれており、しかも太陽の光でもある。一般の人たちは普段から白い服を着ていました」と話す。

葬儀とは、残された者が、いかに死者を悲しむか、死を受け入れるかの儀式である。喪服の変化は、私たちの死に対する感覚の変容を示している。

5月より、新聞や週刊誌の記事・コラムなどから、これはというものを取り上げて、『新聞・雑誌の斜め読みシリーズ』として連載の予定です。